

れたるは、當宗の名譽末代の龜鏡にして彼の高僧傳の如きは只耳目に觸れたる無益の書なる事に言及し、此の御記録は偏に骨髓に徹して感有り珍重珍重恐悦恐悦謹對。と結んで此の問答は終つてゐる。

鶴 聲

吾等人類の上に闇と曙との二が訪れて來た。地球の表面が地獄となるか佛國土となるかの分岐點に世界各國が立つてゐる。

其の中に我國は樞要な役割を演じながら新東亞建設に着手してゐる。外には主人役の將兵軍人が、内には女房役の國民一般が總てが曉に邁進してゐる、一億の國民が一心となり、其の中の各自が自己を殺して各己の責任に勵んでゐる。此の様な意味から私も、清水龍山尊臺と山川智應居士との間に嘗て論争の華を咲かした「當家教學に於ける己心義論」の一端に觸れてみよう勿論此處に書かれる見方が私本來の立場ではなく、筆の動くに委ねて綴られるものであるから、野に溢れた水が目的も無く擴がる様な、極く軽い氣持で讀んで頂けば幸甚である。

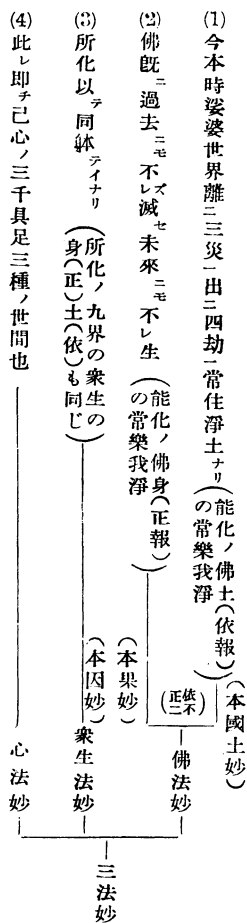
× × ×
兩氏の異見は觀心本尊抄正宗分中の四十五字法脉段に於ける

以上を以て番神問答記の隙見の隙見を終る、素より淺學非才その眞意を知る不能るを恥づのみ。只本問答記の内容の幾分なりとも紹介し得たとすれば、余の幸ひ此に過ぎたるはなし。後日の研鑽を誓ひて闕筆する者也。(五二〇、二 於延山學寮)

細 井 泰 行

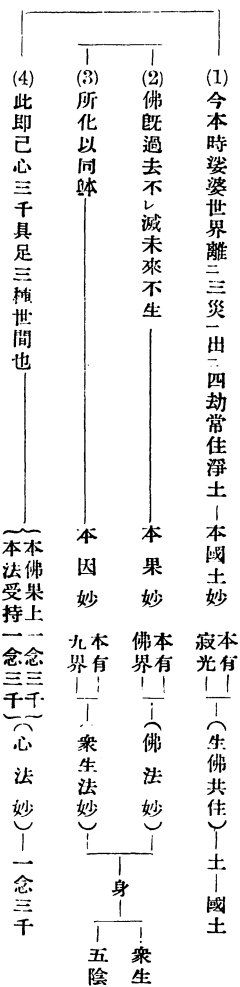
己心を六識とするか九識とするかが根本問題であつたであらうが其の戦火の及ぶ處甚だ廣く、其の論戰の模様は世界大戰にあたり、人心に驚嘆を與へた新武器が飛び出した様に、兩氏の間にも幾多新説を發見した様である。此は私の説でなく兩氏が既に相互を評されてゐるものである。問題は順序として觀心本尊抄の題號釋から這入て行かう。此れに先立つて別個の問題として私達は我國を唱稱して「大日本」「皇御國」「瑞穂の國」「大和」等と種々に叫ぶが、どれが正當で、どれが間違ひであるか義論した事があるが、勿論何方も誤りではないだらう。次に本論に就て言ふと、「如來滅後、五五百歲始觀心本尊抄」と言ふ題號に就て古來から解釋が種々異つてゐるが、兩氏に於ても意見の相異が明らかである。

則ち清水尊臺の説は、



心法妙に就ては—三法各三千を具して皆妙なれど、別して修行の難(佛法の高意、衆生法の廣散にして難)易(自己の心法の近要にして易)に従つて行者の己心に結歸して妙を示す。

山川居士は、



右圖の如く、清水尊豪は(1)(2)を佛法妙とし、山川居士は(1)を生佛共住とし(2)を佛法妙とし、(3)(4)を衆生法妙、心法妙とするは兩氏俱許であるが、(3)の所化以同躰の「所化」を本化とするか凡夫とするかに依て、(4)の此即己心の「己心」が九識本佛果

上の一念となるか、六識陰妄の凡夫心となるかの相異となるのである。則ち山川氏が所化をば本化とし、順縁とするに對し、清水氏は順逆を論ぜず凡夫とする。又「同躰」をば山川氏は「どうたい」、清水氏は「どうてい」

と讀む。

今、右圖に對する清水尊臺の説は、

本門壽量品に來れば、依報の土は久遠本時常住の本佛の「我常在此娑婆世界說法教化」の常住の本國妙土と顯れ、正報の佛身は無始久遠本時常住不生不滅の本佛と現る。此の身土は由來本佛の「或説己身」佛、「或示己事」佛の垂迹示現であるから依正不二である（佛法妙）。唯に能化の佛身（報）土（報）が常住にして不二なるのみでなく、所化の九界の衆生の身土も「亦以同躰」で、常住不二である（衆生法妙）。此の高遠な極果悟理の佛界の身土と廣散な在迷因人の九界の衆生の身土、即ち十界三千の諸法が「即吾等己心の所具」である。故に成道の時此本理（己心所具）に稱つて一身一念に周遍する」と己心を吾等凡夫心とし、四十五字の取意としては「本門壽量文底の實義佛界緣起の身土常住、依正不二、一体三法、事の一念三千の觀心の正体を示されたものである」と、此の文では觀心に注意せねばならぬ。此に對して山川居士は法体段を教相より論じて「此は本門壽量品の佛の身土常住を示すのに、本因果國土の三妙を以てし、從教入觀して本佛果上の一念三千（三大秘法抄の大覺世尊久遠實成の一念三千）を示されたもので、此の本佛因果功德の一念三千も、本佛の大慈悲によつて此の寶珠を妙法五字に裏んで行者に授けられると、行者は釋尊の因行果徳を讓られて釋尊の一念中に攝せられ、本門本有の三千を、己心の功德と受得し、本佛本化を行者の一念の佛界菩薩界とする。」と所化を受持

の行者又は本佛に對する本化としてゐる。

更に己心に就ての兩氏の異義を述べると、清水尊臺の説は

「今文の「己心」とは總題の「觀心」の「心」であり、冒頭總標の「一心具三千法界」乃至此三千在「一念」心「若無レ心而己芥爾」有レ心即具三千」の「一念」「一心」であり。及び觀心の義相を明された文である所の「觀心者觀シテ我已心一見二十法界」是云云觀心「也」の「十界三千能具の一心一念としてあり」當レ知ル身土（十界の依）一念（己心）三千（具）。故に成道（受持）時釋ニ此、本理（三千、事具、一念）一身一念（在迷）遍三於法界」の「能具の一身一念」にして、我等因迷の根塵相對、念々緣起、日夜現前、剎那生滅の六識陰妄の専心である。」として己心の言は吾等凡夫の一心であつて、決して、菩薩佛等の尊い心を指されたものでないと主張してゐる。更に法体門と修行門とに約して論ずる所では「法体門に約すると、内外自他、壽量所顯の三法は各々三千を具して俱に皆妙である。取捨去就の簡擇するものは無いが、修行門に従ふと三法の中に就て觀行の難易を簡んで、近要にして觀じ易い内境自己の心法の妙に就く事は今經觀心の原則で二門一致が當一轍である。」と言ふ。

山川居士は此に對して、

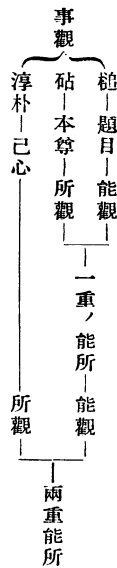
「本門の肝心南〇經の五字七字が壽量品の本佛の觀である事は大人人諸御書の御指南であるから「此即己心三千具足三種世間也」とある「己心」は、本佛果上の「己心」でなければならぬ

い。若し凡夫の「己心」とすると、凡夫陰妄の「己心の三千」をどうしても「此ノ本門ノ肝心南〇經ノ五字」と言はれ得ない。「此即チ己心」の「己心」を凡夫六識陰妄の一念とする時は、「其ノ本尊爲レ體」と擧げられた大曼荼羅も、「九識心王眞如の都」ではなくして、六識妄心中の佛界を顯はされたものとしてねばならない。而して「今本時婆娑世界」等の「四十五字法體」は華嚴乃至涅槃經に至る五十餘年の間を経て、爾前權述涅槃經の身土は無常を免れずと打ち拂ひ、獨り本門壽量品の成道時の身土を取られたものであるから、その「己心」の一念が本時成道の本佛の一念である事は理在絶言の重であり、同時に本佛の所化の「本法受持の一念」である。」と主張してゐる。

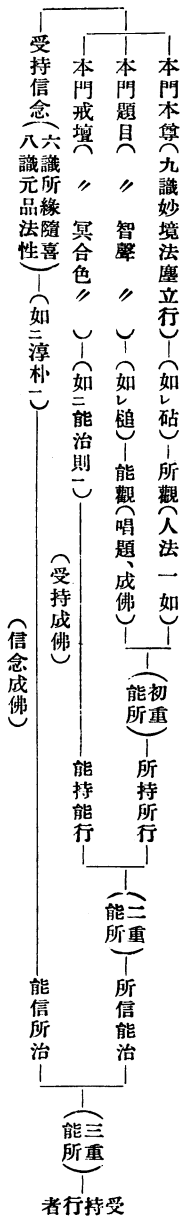
以上に見る兩氏の説が其の論述の順序に間違が無いと思はれるのに、如何なる理で「己心」を或は凡夫陰妄心と云ひ或は本佛果上心と言ふのであるか、此れに對しては獨斷を許されぬものであつて觀心本尊抄の祖意に依つて判斷せねばならぬものである。修行門から見るなれば結果は、山川居士の説に、法体門に約して末法吾等凡夫を主として見る時は清水尊臺の説に相應する。然し何方の觀方が祖意であり何方が正しいかとは速答され難い問題であるが、宗祖の意は少なくとも法体門も修行門も共に攝盡せられた。廣大なものであると觀る可きだと思ふ。則ち慈悲の点から言へば順逆不信の機を撰ばず共に妙〇縁に攝せらるるものであり、折伏の点から當家の最勝を他宗に示されたものと見るなれば本法受持の一念に約して當家の大利益、最終目

的を述べられたものと考へられるのである。

次に兩氏は四明尊者の槌砧淳朴に例して「四十五字法体一の觀心を論じゐるが、清水尊臺は二重能所、山川智應居士は三重能所を以て述べてゐる。則ち清水尊臺の説は



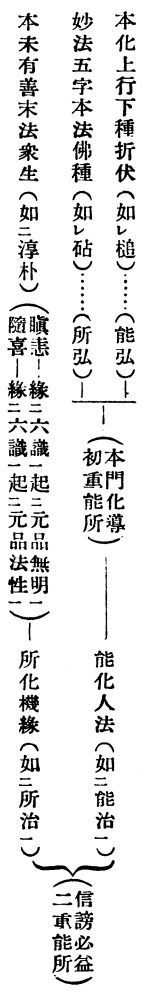
「今我家今文の「己心」を若し高遠なる「佛果々上の心」或は茫漠たる「法界周遍の天心」〔河合日辰氏觀心本尊抄探靈〕を指とすれば、本化本門の事觀が如何に高妙であつても我等底下の在迷因人の六識陰妄の迷心心心（謂ゆる「淳朴（アラカネ）を鑄治修治」を成佛の「器」と成し得ようか、「教彌實ナレバ位彌下ク」最上ノ教、救ニ最下ノ機）の故に「能觀の妙觀の題目の槌」と「所觀の妙境の本尊の砧」と能所俱に一行者己心の淳朴を鑄治修治して、「器」即ち佛と成す事を第二重とする。是れが我家事觀の兩重の能所觀である。」と、山川氏は之に對して、



「受持の信念」とは六識を所縁とし、根本法を根本心である八識元品に下種して、見思末斷の凡夫が元品法性的の新薰となるのを言ふ。此の信念に依て、六識所縁三塵立行、九識本法境地冥合の本門三秘の三重能所髓硯淳朴の修行に依り信念成佛、受持成佛、唱題成佛の三重の成佛を結して「九識心王真如の都」の妙境本尊に冥契し入曼荼羅界するのを、本宗の即身成佛とするのであつて、本門本尊の人法一如は、やがて行者の人法一如を促がし、一分の冥契は一分の成佛、三分の冥契は三分の成佛、十分の冥契は十分の成佛である、信念成佛、受持成佛、唱題成佛の名は三重能所に依ると、信念成佛の信念を基礎として受持の成佛を成じ、その信念受持の上の唱題によつて、初めて唱題

成佛を成ずる、若し信念、受持の無い唱題は蟬鳴蛙騒に齊しく無功無徳である。而して初めの信念を實現し、後の唱題を監督する者は本門戒壇の受持である。故に之の中では受持成佛を中心とせねばならない。」

以上兩氏の説に於て、清水尊臺は、三重能所を要せないと言ひ、山川居士は、二重能所は述門で台祖の依る處で、從因至果の妙行であり、三重能所は本門で聖祖の依る處で、從果向因の妙行であると言ふ。又山川居士は本化別頭末法下種の總益として左圖の兩重能所の義を述べ、三重能所の三大秘法受持成佛はその別益であると言ふ。



以上に依て「己心義論」の一端を述べたが、私達はこれを如何に考へるかに依て、兩氏の説の一方に偏するのである。

例へて言ふと、汽車の發、着に關係せない單なる汽車の時間表か、正確な時間表か、舊の時間表かを考へねばならない。又正確な時間表であるならば、同時に上りと下りの汽車が、着車し又發車するのではないか、或は乗客が時間の錯誤から下りと上りと間違へて目的地とは反對方面の汽車に乗り込んで居るのではないか、等も考へて損はしないと思ふ。最後に私の「ノート」の一節を引いて禿筆を投げよう。

「己心義」に於て、所化の義を山川居士は「所化以與_ト本佛一體也」の義とし、清水尊臺は「同様なり」の義とす。「己心」とあるがゆゑに、凡夫陰妄の「己心」なりと斷ずる事は出来ない。清水尊臺を破する山川居士の説誠に然り、されど所化以同體ならば本佛本化所化の差別無いであらう。故に所化本佛の差別なし。同體なるが故に己他の別なし。「如來とは一切衆生也」……此れ當家の極地である。

戒律への抗議

戒律主義を今日に於て批判の問題とするのは、甚だしく時勢後れであるやうに見えるであらう。併し傳承の戒律を絕對化する

然し同様なる義を考ふれば、佛に遠近、所化に高低の差ありて、本化が之を代表すると雖も、本化以下の機なくば何を以て本化を召さんや、それ本時と云ふ、本時ならざる時あるが故か。然も本時と此土と何の異がある、本時娑婆世界即此土也、本時又々在世也や末法なりや如來とは一切衆生也、本化即衆生の一也。「宗祖然も天台に謙讓せらる」(山川居士説)。「又何ぞ六識を攝するにためらはんや」(清水尊臺説)それ法華經は爾前に異り一切衆生を成佛せしむ、故に六識を己心の中に攝するも又不可あらんや。然れども此見「與」也。「奪」の邊に従へば山川居士の如し、與奪共に當家の許す處、故に一に執するは狹となす。もとより兩説共に不適なるに非ず、更れど一に執するは不可、兩説俱立して此處に本化別頭の道を通ず。

祖文に曰く「心地を九識に持ちて修行をば六識にせよ」(縮一〇五三)と。

禿筆、以て聖意を失せん事を恐る。

(二六〇〇、一〇、二八)

三 枝 光 純

る思想が現代に於ても教育界と云はず家庭の内部と云はず、特に宗教界に於ては甚だしく、凡そ社會の表面を一般に支配して